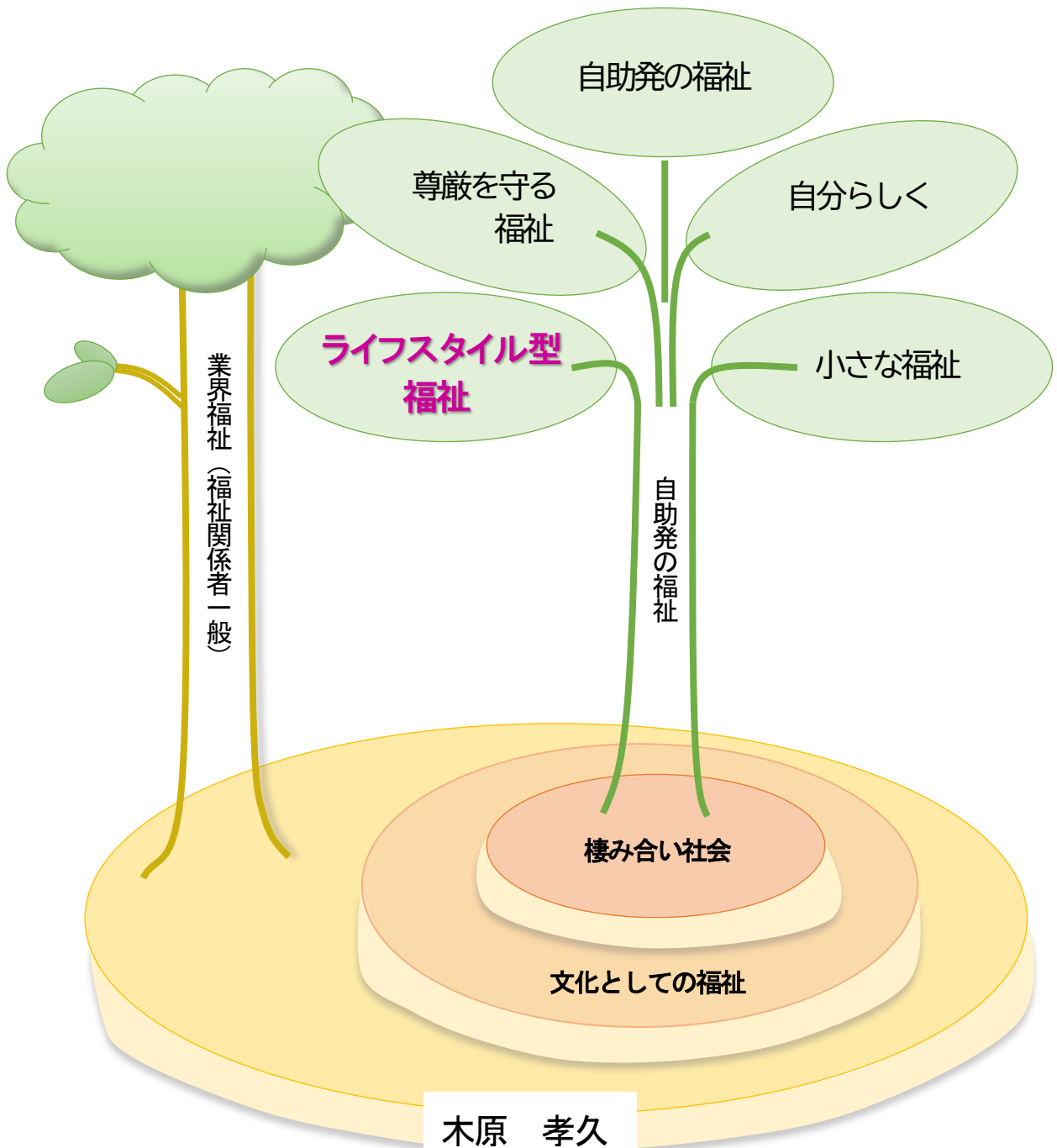


第3章

ライフスタイルとしての福祉



目次

- 1.福祉の文明的手法と文化的手法／ 3
- 2.文明的手法の限界／ 4
- 3.文化的手法とは？／ 1 1

1.福祉の文明的手法と文化的手法

まず始めに、福祉の文明的手法と文化的手法を比較対照させる。今の福祉が文明的手法であることは、全くと言っていいほど意識されていないのではないか。この手法の欠陥を図解してあるが、それを理解していただくことが、文化的手法について考える前提となる。

(1)文明的手法とは？

本書では、福祉に関わる文明的な手法と文化的な手法を対比させながら述べている。文明的な手法とは、全体社会から「福祉」を定義し、それに該当すると思われる部分を抽出し、要援護者と担い手を特定し、前者に後者が効率的に関わるシステムや技術を構築するものだ。

その前に福祉を実施するための推進者を決める。そして人材を養成し、要援護者に差し向ける。要援護者は、障害の種類や要介護度に応じて分けられ、それぞれ指定されたサービスの現場に集められる。そのための場所や資材も確保しなければならず、すべてが人工的なやり方である。

このようなやり方は確かに効率的で、見た目も立派なのだが、それだけ実際の福祉効果が期待されるかと言えば、ちょっと違う。また、経済面などから、この福祉を維持していくのは社会にとって大きな負担となる。

(2)文化的手法とは？

一方の文化的な手法とは、全体社会から福祉の営みだけを抜き出すことはせず、あくまで全体社会での普段の生活の中で当事者と担い手に関わり合い、人々の自然な営みの中で問題が解決していくようにするものである。

住民の日常生活の中に福祉という営みが紛れ込み、他の営みと明確に区分けができない。福祉が行われていることさえも、周りからはよく見えない。しかし規模は小さ

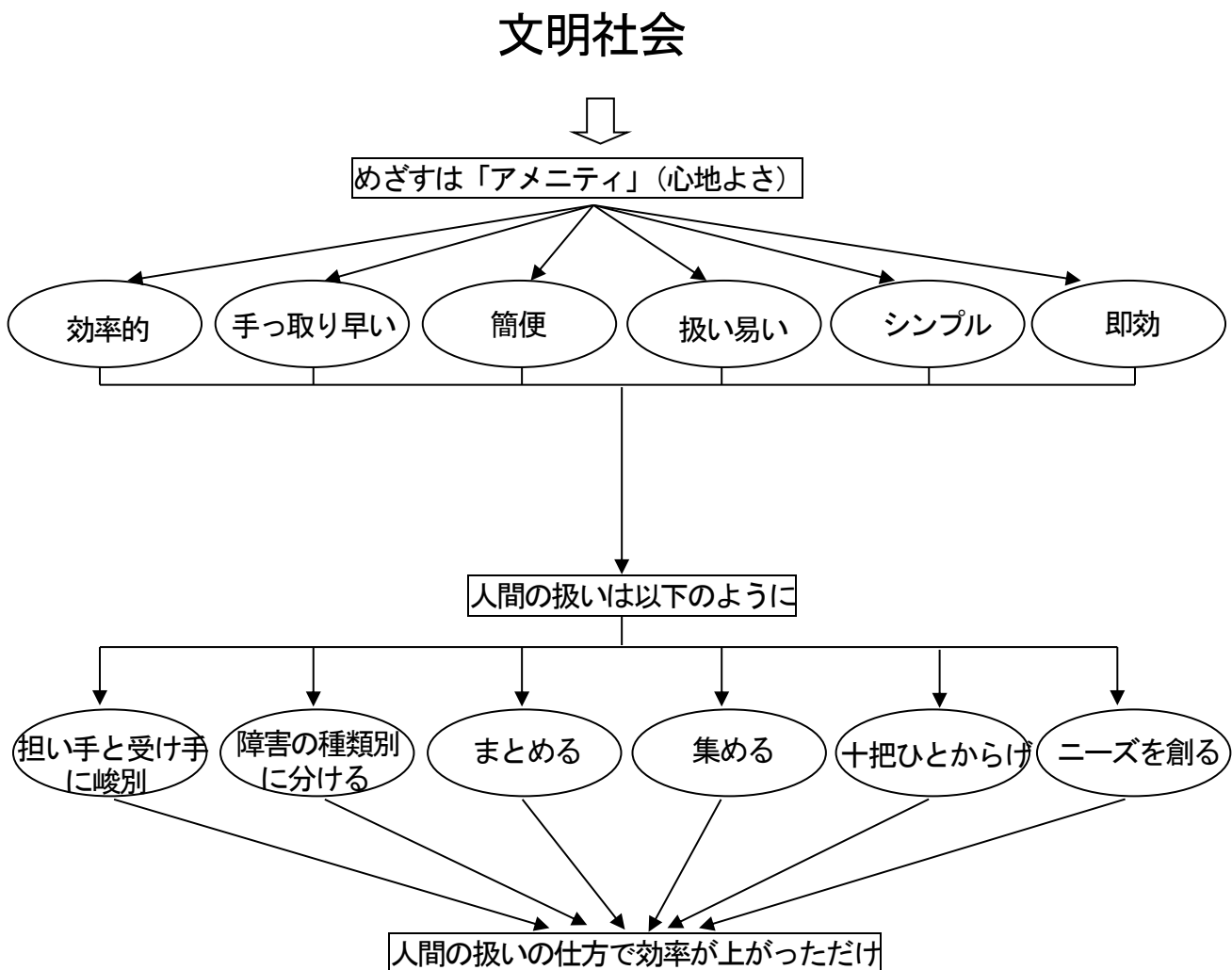
くても、1人ひとりの当事者から活動が生まれるので、実際は当事者にとって満足
いく問題解決がなされる。住民から見たら、ライフスタイルとしての福祉である。

福祉がなされているように見えないのは、当事者がまとめられ、集められていない
からであり、活動に関わっている両者が、いかにも「福祉」と見えるようには動いて
いないからでもある。

2. 文明的手法の限界

(1) 文明とは、効率的で、快適で、面倒がないこと

私たちは文明社会に生きている。文明の利器が次々と開発され、その恩恵で便利な
生活を享受している。文明への信奉はもう自明の理だ。文明がめざしているのは、効



率的、アメニティ（心地よさ）、シンプル（単純）、面倒がない、手軽、やり易い（扱い易い）、即効（すぐに効く）、わかりやすいといったところか。これらが実現すると、たしかに私たちは「心地よさ」を感じるはずで、それに文句を言う人はいないだろう。

①自分の行動でもこれらを追求する

しかし、そういう心地よさを享受しながら、一方で私たちは、自分の行動でもこれらを追求する。私たちは何かをする時、当然のこととして、心地よさ、シンプル、面倒がない、手軽、やり易い、効率的、即効を追い求める。そういう癖ができてしまっている。これぞ文明からの圧力である。この地球を覆っている目には見えない文明という存在から、日々圧力を受けている。

②福祉関係者の7つの「たがる」癖も文明の圧力

私たちがこれから議論しようとする「福祉」についても、文明からの「やり易さを追求する」圧力は日々かかっている。その結果、行政の人や民間の福祉関係者は、福祉をどういうものにしようとするだろうか。福祉に関わる人が、知らず知らずのうちに身に付けてしまっている「癖」というものがある。以下に並べてみたが、それらはまさに文明からの圧力の結果なのだ。

- ①担い手と受け手に峻別したがる。（私は担い手、あなたは対象者）
- ②対象者を分けたがる。（障害の種類別で分け、要介護度で分ける）
- ③一方的なサービスにしたがる。（お返しは受け付けない）
- ④引き寄せたがる。（福祉サービス、（相談）センター）
- ⑤集めたがる。（会食会に集まれ。サロンに集まれ）
- ⑥作りたがる。（サービスや活動をつくり、イベントをつくる）
- ⑦指導したがる。（募集し研修し組織化し、グループを作らせる）

(2)文明は推進者主導・担い手主導を加速させた？

たしかにこういうやり方だと、効率的で、やり易い。問題は、誰にとって「やり易い」のかという点である。それは当然、福祉の推進者や担い手にとって「やり易い」のである。

一方で、福祉の対象者の位置に置かれた当事者や、推進者の指導を受ける住民にとってはどうなのか。推進者や担い手が指導するがままに、分けられ、集められ、どこかに引き寄せられることになる。

文明的なやり方は、推進者主導・担い手主導の福祉をつくり出す。

今の福祉の利点も欠点もすべてこの推進者主導・担い手主導の利点であり欠点なのである。

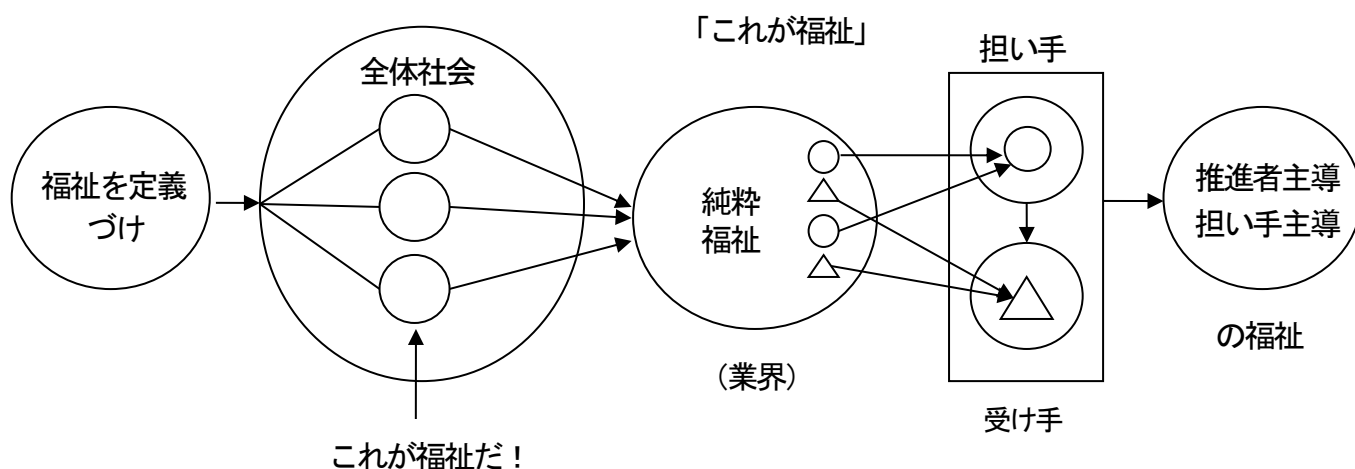
(3)全体社会から「福祉」の部分を抜き出す

福祉における文明的手法とは、以下のようなものだ。

まず「福祉」という営みを（他の営みと区分けして）定義し、全体社会の中から、その定義に合致する営みだけを取り出し、そこに純粋な福祉の営みだけの世界をつくり出す（これが「業界」だ）。その上で、さらに福祉の対象者と担い手を峻別し、特定の場所に集める。そして担い手が対象者にサービスを提供するという関係を作り上げる。

福祉を「効率的に」進めるために（これが文明がめざすこと）は、たしかにこの手法だと「やり易い」。福祉というあいまいな概念をあいまいなままに放置せず、明確に定義する（単純化）。そうした純粋福祉の世界をつくった上で、担い手が受け手にサービスをするという形にする。

(4)定義づけから外れた人たちは救いの対象にはならない



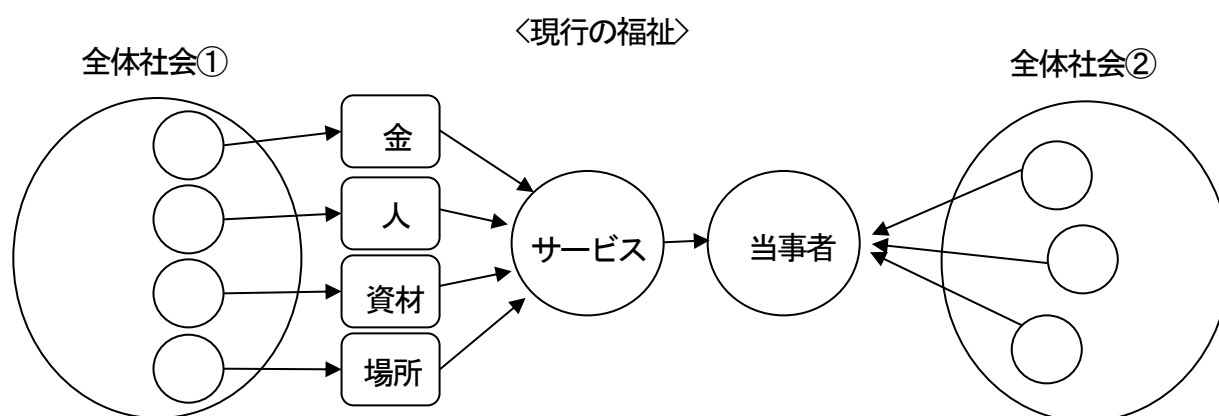
実際に、このやり方でたくさんの要援護者にサービスが提供されている。だが、その定義づけから外れた人たちは対象にならない。純粹福祉の世界の中だけに、どの程度の福祉資源がある（いる）だろうか。国民全体のうちの、極めて限られた、特定の人々しか参加していない。人材の種類も数も限られているから、それだけ救われる対象や人数も限られてくる。

しかし、こういう仕組みに既に参加している人は、それをつくり、動かすことに
心を集中させていて、そこからどういう人のどういうニーズが外れているかにはあま
り目が向けられていない。

介護保険制度が行き詰まり、要支援の人たちを地域に戻すことになったため、その埋め合わせとして、生活支援コーディネーターを配置し、住民の助け合いによってそれらの人たちを救おうとした。ところが、そのための助け合いの仕組みづくりでも、やはり文明的な手法が取られているから、残念ながらあまりうまくいっているとは言えない。現にこれを推進している人の共通の悩みは、集まって来る住民は「いつも同じ顔ぶれ」で、その人たちにも「やらされ感がある」ということらしい。

(5)相手をまとめようとするから、たくさんの資源が必要になる

もう1つの図を見ていただきたい。サービスの作り方だが、このように全体社会の中から、資金と人材、資材や場所などを確保し、これを組み合わせてサービスをつくり出し、これを対象者に振り向ける。と言うと、いかにも「効率的」な感じがするが、じつは違う。



文明の手法というのは、効率を求めてこういう方法を取るのだが、現実には効率的になっていない。

サービスのための諸要素を集めるために膨大なエネルギーを必要とするのだ。

ではどうしてこれだけの要素を集めなければならないのかと言えば、対象者を障害の種類や要介護度などで分けて集めた上で、それぞれの人たちに恒常的にサービスを提供しようとするからなのだ。

これが文化的な手法だと、大抵は一对一の関係でサービスは行われるから、資源をたくさん集める必要はない。相手は1人なのだから、その人に提供できる資源が1人分だけあれば、サービスは成り立ってしまう。そしてその資源は、そのためにわざわざ福祉に特化した資源をつくり出す必要はない。社会の中で自分のニーズに応じられる資源があるところに、要援護者が近づいてくるということが多いのだ。

まとめれば効率的なのは、相手が人間ではなく、モノの場合ではないか。人間の場
合は、1人ひとりのニーズが異なっているから、特定のサービスのための資源ばかり
たくさん集めても、当事者の望みには沿いきれない。むしろ社会の中に無数にある多
種多様な資源の中から、必要な要素が揃っている所を当事者の側から選んでいく方が
効率的だ。

しかもその場合は、お金や場所、資材などの多くは、わざわざそのために用意する
必要はないはずである。

知り合いからこんな話を聞いた。認知症の女性が毎日、銭湯にやって来て、客の衣
類を畳んでいる。畳むと気が休まるらしいので、番台のおばさんも常連客も容認して
いる。番台のおばさんは、初めての客が驚いて女性を止めようとする、「畳ませてあ
げなさいよ」と説得してあげている。

この認知症の女性が必要としているのは、「畳むものがたくさんある」ことで、そう
いう意味で銭湯はぴったりの場所だ。ここにある「人材」は、女性を受け入れてくれ
る番台のおばさんであり、毎日来る客だ。「場所」は銭湯そのもの。服を畳ませてあげ
ること自体が「サービス」になる。「資金」は要らない。番台のおばさんが、巧まざる
「コーディネーター」だ。

要するに、このサービスを女性に提供するのに、新たに整備しなければならないも
のは1つもない。というより、それらが全部そろった場所に当事者がやって来て、そ
こで自らのニーズを自分で充足させる。何もしないのに、当事者から見たら最高のサ
ービスが行われている。

大事なのは、いかにも「福祉」サービスが行われているという形があることではな
く、本人がそこで充足しているということではないか。

地域社会の中で、当事者がそれぞれのニーズの充足を求めて、あちこちに出かけて
いる。そこでニーズの充足がなされているなら、そこが福祉の現場なのだ。

評価の基準を当事者の側に持ってくれば、それをそのまま認めるべきだ。

地域全体を眺めれば、当事者は無数に存在する。だが、そのことに思い悩むことはない。よく見れば、それぞれが自分のニーズの充足を求めて行動している。それが福祉資源かどうかは、本人が決めることである。少なくとも、地域社会には無数の資源があるから、無数の当事者の要望に応じきれない心配はない。地域社会の懐の深さは、私たちが考える以上のものである。

超高齢社会を迎え、福祉業界の限られた資源だけですべての要援護者のニーズに対応することなど、とても不可能だ。今こそ、地域社会の多種多様な資源を福祉に取り込んでいく必要がある。

(6) 「ボランティア」を定義したことの損失

社会（福祉）への市民の参加を促すための、「ボランティア」という言葉。たしかにその目的は達せられたが、一方で、市民参加の枠を狭めてしまった。総務省が実施する市民の社会参加調査では、いつも同じ結果が出てくる。参加しているという人はわずか十数パーセントで、6割ぐらいが「機会があったら参加したい」「条件を整えば参加したい」と答える。

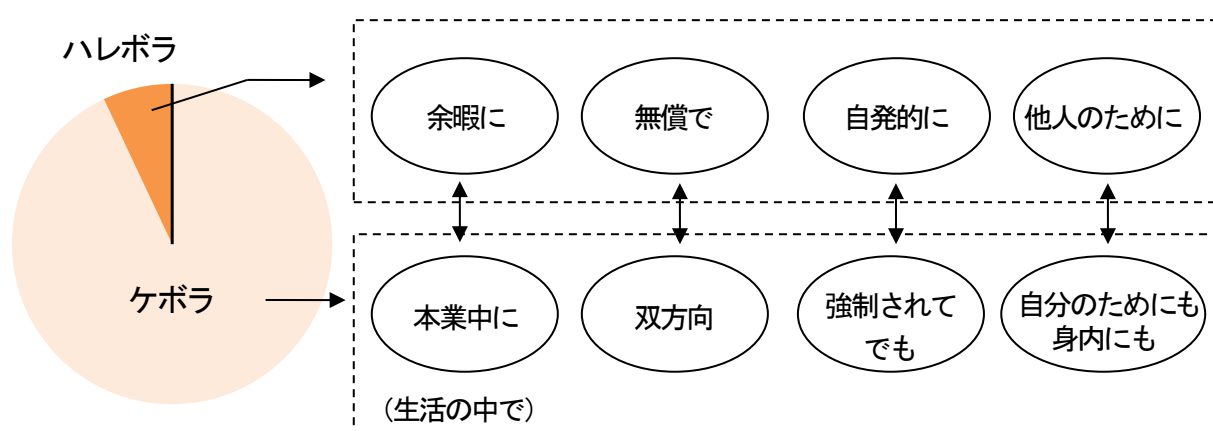
「ボランティア」の定義として、余暇活動だとか、自発性が必要だとか、無償の奉仕でなければならないなどと、厳しい要件が並ぶ。その結果、参加者がこんなに少ないのは、当然の帰結なのだ。

次のグラフを見ていただきたい。いわゆるボランティア活動に参加しているという人たちの活動を、私は「ハレ・ボラ」と呼んでいる。「ハレ」とは、非日常的な営み。普段は特に何もしないが、日曜日になると「さあ、やるぞ」と出かけていく。ボランティアとはハレの営みだと思われている。

一方で、「機会があれば」「条件を整えば」活動するという人たちは、本当に何もしていないのか。よくよく聞いてみると、そんなことはない。本人もほとんど意識せずにやっている活動を、私は「ケ・ボラ」といつている。非日常の「ハレ」に対し、「ケ」

は、日常的な営みのこと。仕事やご近所づきあいなどの日常生活の中で、何気なく、場合によっては本人も意識しないうちに、人のためにやっていることがあるのだ。

ところがいわゆる「ボランティア」の狭義の定義付けがされたおかげで、数字上は、社会活動をしている人の数が極端に制限されることになった。しかしケ・ボラも含めれば、ほとんどの人はすでに何らかの活動をしているのであり、「あなたもやっているのですよ」とそれを認知してあげれば、活動意欲も上がっていくはずなのだ。



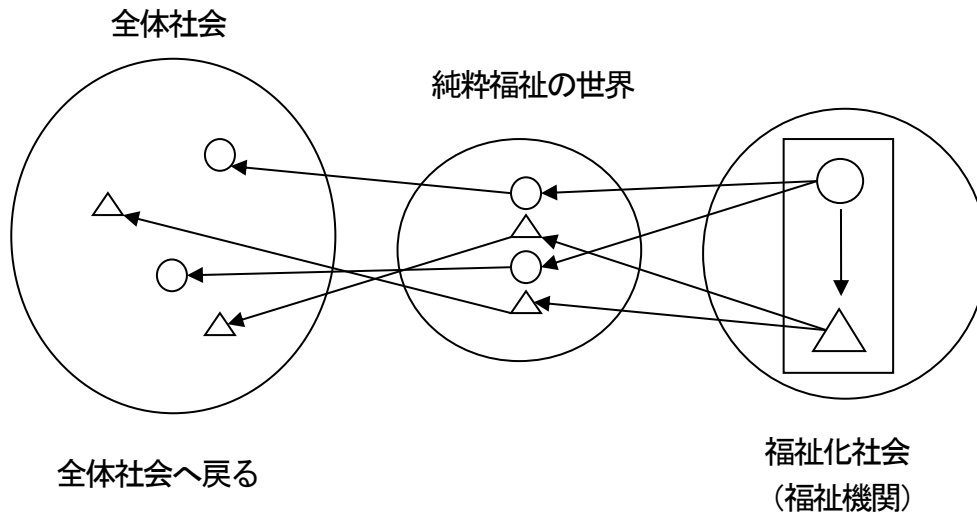
3. 文化的手法とは？

(1) 福祉の世界から、再び全体社会に戻る

先ほどの7ページの図のフローを「逆流」させてみたらどうか。次の図を見ていただきたい。当事者は福祉の世界に集められて、福祉機関から福祉サービスを受けるが、そこでニーズを十分に満たされているとは言い難い。そこで、福祉だけの世界を離れ（またはそこでのサービスも継続しながら）、再び全体社会に戻る。その中で、当事者は自分のニーズを充足させてくれる場と人と資材を求めていく。これが文化的手法だ。

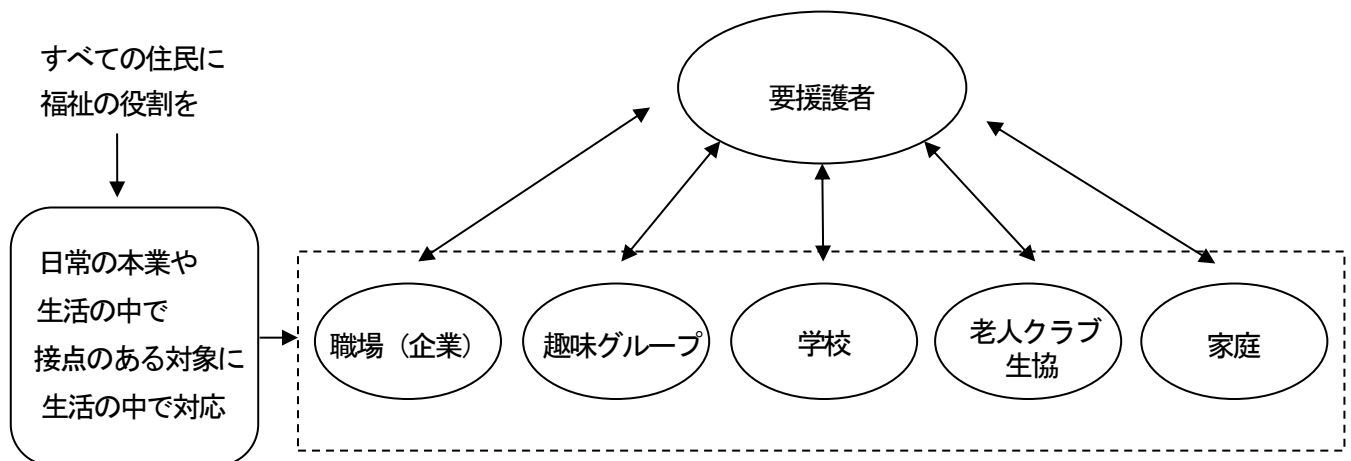
だから文化的手法は、当事者主導で進めるものなのだ。大抵は福祉サービスの選択はケアマネジャーや家族などが主導して行われるが、文化的手法では、当事者自身が、自分が本当に欲しい資源を地域から探し出し、それを自分なりに使いこなす、という

のが基本パターンになるのだ。



(2)地域の多様な組織に問題の解決を求めて当事者が近づく

ところで当事者は、自分のニーズを充足させたいと願って、特にどういう所に行っているのか。次の図を見ていただきたい。地域にはたくさんの人がいて、次のような所に行っている、または「いる」。そしてそれらのいずれかに、自分のニーズの解決を求めて、当事者が近づいてきている。(またはそれらの人材が当事者の所に行っている。)



例えば、お父さんは会社に通きに行き、お母さんはパートやPTA、生協、趣味グループに行き、おじいさんは老人クラブやシルバー人材センターへ、おばあさんは婦人会やサロンへ、子どもは学校へ行っている。

こうした勤務先や活動先に、福祉ニーズが近づいてくる。そこでそれぞれの人たちが対応すれば、こんなに効率的なことはない。

これこそが「効率的」というのではないか。人々が日常生活（業務）をしている場が、ボランティアセンターの窓口にもなり、しかもその場で即対応してしまう。

例えば、レストランでお子様ランチを注文した高齢客がいたときに、レストランの側が「ああ、高齢者は少量のメニューを求めているのだ」と察知すれば、次からは、大人向けだが量と価格を抑えたシルバーメニューを用意するかもしれない。これでもう、1つのニーズに応じた、つまり福祉をしたことになる。しかも、初めは特定の1人への対応だったが、メニューができれば、これ以降はこのニーズを抱えた沢山の当事者に対応できる。

ある老人クラブに、認知症の人が「入れてくれ」と来た。リーダーは歓迎したが、仲間は複雑な思いだ。旅行へ行けば、気をつけていないとその人だけどこかへ行ってしまう。グラウンドゴルフをする時も、その人に配慮をしなければならない。元気な人だけの活動に比べれば、面倒だ。しかし、そのちょっとした手間を受け入れるだけで、「活動をした」ことになるのである。そして、サービスは不要になる。当事者の側も、いわゆる福祉サービスの場に行くよりも、こちらの方がありがたいはずだ。

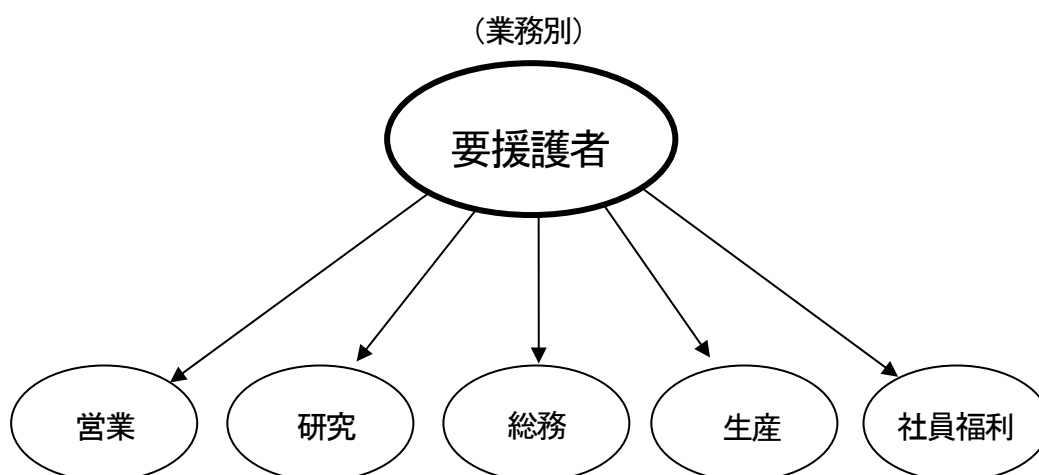
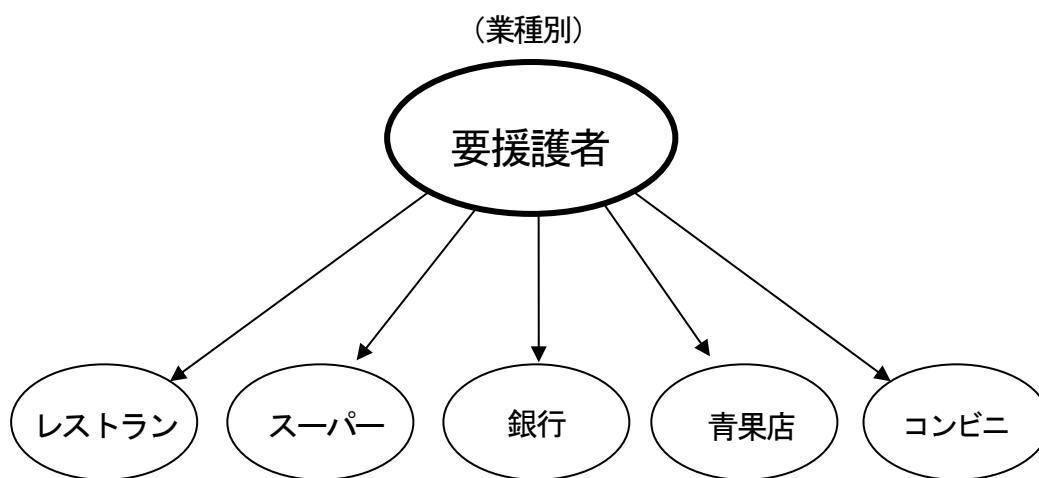
(3)本業の受け皿はこんなにたくさんある

一口に「本業」と言っても、それこそ無数の本業がある。企業なら、例えば企業活動のさまざまな側面がある。総務や営業、研究部門や生産、社員研修部門もある。そのそれぞれに当事者が近づいている。またスーパーや映画館、レストランなどの業種別のリストを並べただけでも、相当数ある。公務員も、消防署や役場など多数ある。趣味グループ1つとっても、たくさんのグループがあり、それぞれの持ち前の腕で貢

献できることがある。そこに、当事者が近づいて来ている。

地域には無数の資源があって、そこに当事者が支援を求めてきている。それを地域に1カ所しかないボランティアセンターがコーディネートするのは無理だから、それぞれの部署や組織が窓口らしきものを作って対応すればいいのだ。

<様々な本業>



(4)日常生活（業務）の接点での対応の利点

このような日常生活の接点での対応には、多くの利点がある。

- ①各自の生活や本業の場でできるから、日常生活の中で、いつでも活動できることになる。
- ②本業の腕をそのまま使うから、大きな力が発揮される。
- ③すべての人が何らかの営みをしているから、その現場でやれば、すべての人が福祉に参加することができる。
- ④当事者と出会った時に、出会った場で関わればいい。福祉センター等へ行く必要はない。
- ⑤当事者がそこへ来たということは、そこにすでに必要な資源がかなり揃っているということだから、あらためて資源を取りそろえる必要はない。
- ⑥その活動の効果は当事者が判断するから、担い手が心配する必要はない。
- ⑦自分でも気付かぬうちに活動しているかもしれない。当事者もまた、活動してもらっていることを自覚していない場合もある。それでいい。

(5)文化的手法は頼りないか？

誤解されやすい点は、上記の利点の中の②である。文化的な手法は、福祉を専門としない地域のさまざまな組織が、当事者との接点で関わるというものだが、それでは力不足ではないかと思われがちだが、これは大いなる誤解だ。

例えば企業が持っている力は、以下に事例をあげたが、これが企業という存在の文化的手法なのである。それで収益を得ているその力を、ちょっとだけ福祉に振り向ければ、かくのごとく大きな力を発揮するのだ。

- ①ゲームソフト会社が「思いやりを育てるゲーム」の開発
- ②商店街が定期的に特養ホームなどに出向いて「出前商店街」
- ③映画館が自閉症の子供向けに「刺激の少ない上映会」
- ④化粧品会社が美容と健康のライフデザインセミナー
- ⑤喫茶店が店内でふれあいイベントの開催
- ⑥訪問販売のついでに一人暮らし高齢者の見守り、買い物
- ⑦自社広報にNPOの広報を相乗りさせる
- ⑧公民館の出前講座を企業として受け入れ、一般公開
- ⑨会社内に元社員が利用できるサロンづくり
- ⑩研修センターを生涯学習センターとして開放
- ⑪障害者と共同の子会社づくり。ホームレスの人や犯罪少年を試験採用
- ⑫製造業（工場）が高齢者の力を生かせるラインを開発
- ⑬訪問販売・宅配を生かして、福祉サービス情報の提供
- ⑭会員向けボランティア講座をひらき、一般公開も
- ⑮「苦情は宝」と積極的に対応
- ⑯靴屋が障害等で左右の足の大きさが異なる人に「左右バラバラでも売ります」
- ⑰化粧品会社が、やけどやあざで悩む人向けのメイク法を開発・指導

社会の力を本格的に福祉に取り込んでいくためには、福祉機関も、認識を大きく変える必要がある。

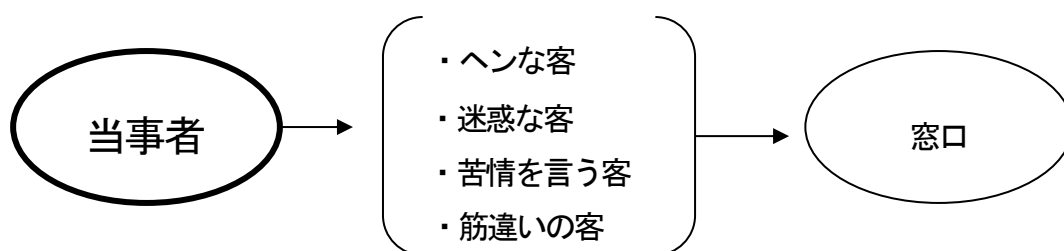
福祉機関自体が福祉を行うというよりも（もちろんその部分もないことはないが）、福祉機関には、社会が持っている力（例えば企業力）を福祉のために効果的に活用するコーディネーターとしての役割が期待されているのだ。

リハビリテーションは、必要なのは分かっているけど続けるのは大変だ。できれば楽しみながらリハビリをしたい。その願いにこたえて、国が興味深いことを始めた。ス

ポーツジムや健康関連企業などでリハビリをしたいという人に、医者からカルテを提供できるように取り計らったというのである。力を持っているのは、企業なのだ。それを活かせるようにすればいい。

(6)「ヘンな客」「苦情」「筋違いの客」に福祉ニーズがある

各職場やグループなどで福祉ニーズに対応する人が心得るべきことの1つが、当事者の多くは、いかにもそれらしい姿ではやって来ないということである。一見、「ヘンな客」「苦情を持って来た客」「筋違いの客」と見えるところに、福祉ニーズがあるのだ。それをきちんと見分けて、ニーズを解決してあげる力量が求められる。



企業の場合、こういう客にきちんと応じれば、新しい顧客サービスのヒントが得られるかもしれないし、新しい商品のヒントにもなるから、自社の利益にもなる。

(7)職場の意向ならやるという気風をうまく生かす

もう一つ、資源としてその組織が機能するための要件として、職場のトップがそういう活動を社員に促すどうか、ということもある。職場にそういう空気ができれば、活動する（みんなが参加するなら、する）—これが日本人の気風である。

日本という国では、「社会参加」という言葉は理解されない、というよりは、日本人のセンスに合わない。日本人にとって社会参加をするということは、特定の組織に加入するということなのだ。そしてその組織で促された活動ならやる、という気風をうまく生かせば、職場がそのままそっくり活動体になり得るのである。

それだけではない。富士ゼロックスが、自社営業所のカラー複写機を、拡大写本作りのボランティアには無償で使わせてあげるという社会貢献活動をしている。それがどういう経緯で始まったのかを聞いてみたら、1人の営業マンに行き着いた。

彼は、奥さんが弱視児のために教科書の拡大写本を作るボランティアをしていて、何が大変かと聞いたら、写真やイラストを手描きで写すのが難しいという。「それなら、わが社のカラー複写機を使えば簡単だよ」と言ったものの、これは商品だから、みだりに貸すことはできない。営業所長に聞いたら、奥さんのグループに限定して特別に貸し出そうということになった。ところができあがった写本を、奥さんが全国拡大写本大会で発表してしまった。それを見た参加者は、それぞれ地元の富士ゼロックスに押しかけた。そこで、これほど求められているなら、これをわが社の社会貢献活動にしようということになったのである。

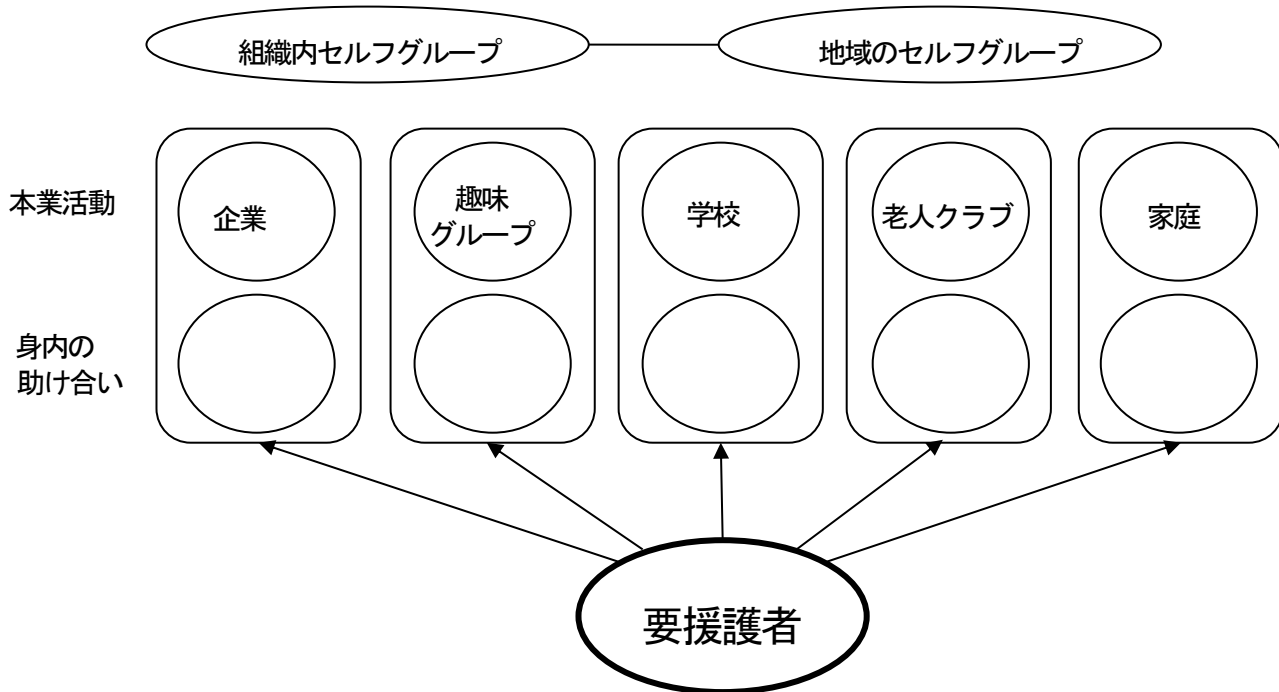
企業の社会貢献と社員の活動がつながっている場合が多い。ボランティア活動は必ずしも社員が余暇で個人的に参加する必要はなく、社員個人のボランティアと会社としての社会貢献は一体でいいのだ。それによって企業の本業の力が活かされる。

(8)当事者の身近にいる様々な人材が動けば

ところで、当事者は地域のさまざまな職場やグループにニーズを持ってくるが、一方でそれらの組織の中にも当事者がいる。その当事者を、仲間が助けているだろうか。先ほど挙げた組織のいずれにも、当事者を受け入れる機会があつて、それを受け入れれば素晴らしい活動になる。

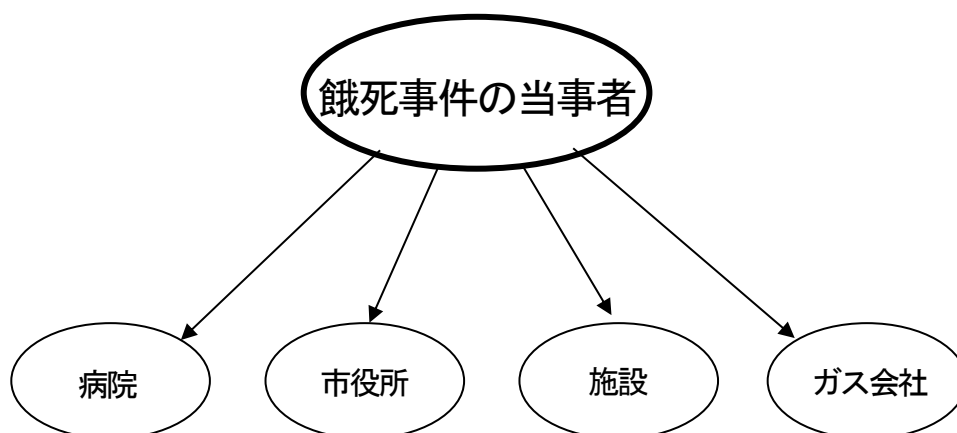
地域の組織は、1つは、接点で地域住民からの福祉的な要望に対応する、もう1つは①その組織に当事者を受け入れる、または②その組織内の当事者の要望に応じる、または③組織の中で当事者同士が助け合うという、2つの活動の機会を持っているのだ。

①例えば老人クラブが認知症の人を仲間に加えるとか、②子育て中の社員のために



社内保育所をつくるとか、③同じ職場の女性たちが同僚同士で子どもの預け合いをす
るとか。この2つの活動を地域のあらゆる組織が実践した時、膨大な活動が生まれる
ことになる。あとは、これをどこまで実践できるかである。

接点活動の効果は確かにすごいものがあるが、それには接点の人が対応しなければ
意味がない。北海道札幌市の白石区で餓死・凍死事件が起きた。2人姉妹、姉は脳に
持病を抱え、妹は知的障害。姉は妹に言っていた。「お姉ちゃんがいいと言うまでは外
へ出ては駄目よ」。ある日、姉は脳梗塞で倒れた。外へ出ては駄目と言われていた妹は、
姉の脇で凍死・餓死していた。



誰かが気づかなかったのか。姉は外科医院に行っていて、「もう一度来るように」と言われていた。妹のことで、施設に相談もしていた。市役所には生活保護のことで出向いていた。ガス会社は2人の家のガスを止めたので、ガスを止めれば2人がどうなるかは知っていたはずだ。このように、少なくとも四者が「気になる」と思っていた。そして「まあ、またやって来るだろう」と、何となく考え、放置していた。

(9)そこに世話焼きさんがいるか？

これまで述べてきたことは、確かに効率的であり、これで地域全体にセイフティネットが作れる可能性がある。しかし考慮しなければならない点もある。これは、確かにやり易いが、だからと言って、だれでもできるというものではない。その現場に世話焼きさんがいるかどうか、成否のカギを握っているのだ。

例えばあるレストランで、親から虐待を受けている子どもが保護された。家族で来店したのに、その子だけ、親が料理を注文しなかった上、痩せていて体に傷もあることが気になったウエイトレスの女性が、それを放置しなかったからだ。彼女がその子にそっと「助けが必要なら、言ってね」というメモを見せると、その子は「助けて」と合図をした。店は警察に連絡し、子どもは救出された。

そこに世話焼きの資質のある人がいれば、いろいろな接点でこういう対応ができるが、誰でもできるとは限らないのだ。

①コンビニ店員が「気になる」客に声をかけるようになった

ちょっと心細くなってきたが、希望はある。たとえば最近、コンビニ店で振り込め詐欺の被害にあいかけた人に、店員が気付いて声をかけ、未然に被害を防いで助けたというニュースを日常的に目にするようになった。といってもこれは、コンビニの店員に世話焼きさんが増えたというわけではなく、振り込め詐欺の現場になりやすいため、店側がこのような対応を呼びかけたりすることで、店員が意識して積極的に顧客に声をかけるようになったからだろう。

これまでなら、ちょっと気になることがあっても、お節介になりそうで声をかけずにいた人たちに、積極的に関わってもらおうよう、それぞれの場で指導していけば、こういう対応を増やしていくことはできるはずだ。特にコンビニの事例のように、各職場やグループごとに、そこにはどのようなニーズを持った人が来るのか、どのような問題に自分たちが接点で関われるのかを考えてマニュアル化していくといいだろう。

また、大型の世話焼きさんを探そうとすれば、どこにでもいるというわけにはいかないが、小型の世話焼きさんなら、どの職場、どのグループにも何人かはいるはずだ。そういう面倒見の良い人を担当にすればいいのだ。

②大型の世話焼きさんを支援する小型が何人かでセイフティネット

こんなヒントもある。神奈川県のある地区で「影絵児童館」を開いている女性がいた。その頃、都市圏で「小さな児童館」運動が広がっていた。彼女が、たまたま娘の誕生日に近所の子どもも集めて自分の作品を上演して見せたら、子どもはその美しさにびっくりして、自分たちもやりたいと言い出したという。

彼女の児童館活動は影絵にとどまらず、いろいろなイベントをするようになった。隣の空き地でのお化け大会には500人もの参加者があったという。

これをすべて彼女1人でできるわけではない。いろいろな手伝いの人が集まってきた。まさに大小の世話焼きたちである。おかげでこの地区は「子どもに何かあったら、みんなが駆け付ける」ご近所になったと言われるようになった。子どもたちのセイフティネットが出来上がったのだ。

具体的にはどういう風にできたかという、まず彼女の家が「全びらきの家」（いつも自宅をひらいて児童館にしている）とすると、次いで、彼女が開けないときに、代わりに子どもたちに「うちへおいで」と言ってくれる人が2、3人いる。これが「半開きの家」。さらに、家は開けないけど、彼女がイベントをするときは手伝うという「小開き」の家が数軒できた。この大中小の「ひらいたママ」たちのおかげで、子どもが安全に遊べる地区になったというわけだ。

1人の大型世話焼きさんがこのように、その他の世話焼きさんの支援を受ければ、ネットワークは出来上がるのだ。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1 4 7 6 - 1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
